平成９年12月22日　発行
『密教図像』第16号　抜刷

パーラ朝の金剛手・金剛薩埵の図像学的特徴

森　　雅　　秀

パーラ朝の金剛手・
金剛薩埵の図像学的特徴

森　　雅　秀

1　はじめに

密教の時代，とくに中期密教以降には，観音や文殊などに代表される大乗仏教の菩薩にかわり，「密教の菩薩」とも呼ぶべき尊格が数多く登場した。その代表的な菩薩が金剛薩埵 Vajrasattva である。密教のもっとも重要な述語である「金剛」に，「菩提薩埵」すなわち「菩薩」の語の後半部分を加えて作られた尊名には，この尊格の人工的な成立がよく示されている。金剛薩埵がはじめて重要な菩薩として登場したのは，中期密教を代表する経典『真実摂経』*Tattvasaṃgraha*（『初会の金剛頂経』）である。この経典を典拠とする金剛界マンダラでは阿閦の親近菩薩としてその前方に位置し，十六大菩薩を率いる。金剛薩埵は後期密教の時代になるとさらに重要性を増し，仏の中でも最高位の本初仏としての扱いさえ受けるに至る。とくに，『理趣経』を先駆とする母タントラ系の経典では金剛薩埵族を形成し，その部族主となる。

『真実摂経』では金剛薩埵は金剛手と同一視されている。[(1)]「金剛手」Vajrapāṇi という尊名は「金剛杵を手にするもの」を意味し，古くは『リグ・ヴェーダ』の中でインドラの別名として登場する。そして，仏教においても初期の経典や仏伝にすでに現れ，「密迹金剛力士」「執金剛」の名でも呼ばれ，釈尊の随伴者，護衛者としての役割が与えられている。[(2)] ヘラクレスを思わせる容貌をそなえ釈尊につきしたがう金剛手の姿は，ガンダーラ美術の仏伝図にしばしば登場する。ガンダーラとほぼ同時代のマトゥラーの仏教美術の中にも，手に金剛杵を持った脇侍の姿が散見される。[(3)] グプタ時代からポスト・グプタ時代の主要な仏教美術の中で，金剛手は菩薩の中でも重要な位置を占めるようになる。この時代の代表的な石窟寺院アジャンターやエローラでは，観音や弥勒とともに金剛手の作例も多く見いだされる。

このように古くから知られていた金剛手や，教学上は金剛手と同一視される金剛薩埵は，インド密教の時代にはどのようなイメージをそなえていたのだろうか。

パーラ朝の版図であったベンガル，ビハール地方と，その南に位置するオリッサ州の作例から，これらの点を明らかにしよう。[4]

図1　金剛手坐像　インド博物館

2　パーラ朝の金剛手の一般的特徴

単独像

パーラ朝の時代の金剛手の単独像の作例は9例を数える。これらは5例の坐像と4例の立像に分かれる。このほかに，如来像の脇侍として金剛手が表された作品が4例ある。脇侍は立像が3例，坐像が1例である。密教のパンテオンにおける金剛手の重要性を考えると，この数は驚くほど小さいものである。将来，新たに金剛手の作例が発掘されることは十分予想されるが，この時代にとくに好まれて作られた観音や文殊の作例数にその数が並ぶことはあり得ないであろう。

作品数がわずかであるので，主要な作品について1例ずつ特徴を記述しよう。

はじめはカルカッタのインド博物館所蔵の金剛手坐像[1]である（図1）。[5] 博物館のキャプションによれば，この作品はビハール州出土とされるが，光背や台座の表現から見て，おそらくボードガヤーかナーランダーから発掘されたものであろう。[6] パーラ朝の作品にもっとも多い黒玄武岩を素材とし，高浮彫で表現されている。坐法は左足を垂下させ，踏割蓮華の上に置く遊戯坐である。右手は胸の前に保ち，左手は左足の膝のあたりに置く。右手の掌の上には，一部が欠損しているが，金剛杵が垂直に立っている。尊名の通り，金剛杵を手にするのである。さらに，左手に持つ睡蓮の上にも直立した金剛杵が置かれている。頭髪は渦巻のような形態で表されている。この髪型は金剛手の作例に多く見いだされるものである。本稿では，以下，渦巻冠と呼ぶことにしよう。額には頭飾を付け，冠帯が左右にひるがえる。肩には垂髪も表現されている。丸い大きな耳飾り，豪華な首飾り，臂釧，腕釧，腰飾りを付け，ドーティをまとう。左肩からは聖紐も垂らす。台座の左右には獅子の浮彫があり，光背の上部左右には仏坐像も表現されている。向かって左の仏は通肩で転法輪印を示し，右は偏袒右肩で触地印を示している。印相との対応では，大日と阿閦を予想させるが，いずれも釈迦仏に一般的に見られる印でもあり，尊名の断定はで

きない。

ナーランダー出土の金剛手坐像[2]も，インド博物館の作品とほとんど同じ特徴を示す。遊戯坐で垂下させる足が右足にかわるが，渦巻冠，頭飾，丸い大きな耳飾り，首飾り，臂釧，腕釧，聖紐で同様に体を飾る。ドーティには衣紋のひだが数本表現される。この尊も右手の持物が欠損しているが，おそらく金剛杵を持っていたと考えられる。左手に持つ睡蓮の上に金剛杵が直立しているのも，前例と同じである。

図2　金剛手坐像　ナーランダー博物館

ナーランダーからはもう1例，浮彫の金剛手坐像[3]が出土している（図2）。様式から判断して，パーラ朝のかなり初期の作品と考えられる。この作品はこれまでの2例といくつかの点で違いがある。まず第一に，左手の睡蓮の上に金剛杵が表現されていない。花の表現は共通で，やはり左手で茎を持つのであるが，花の上から金剛杵のみが姿を消している。もう一つの相違点は頭髪である。渦巻冠はとらず，長い髪を頭頂のあたりでいったん結わえ，いくつも髪の房を作り，それを肩の方まで垂らす。装身具はこれまでの作例と共通のものを身につける。ただし，耳飾りは円形の大きなものではなく，数珠のような独特な形を取る。光背の上部左右に第1例と同じように二体の仏坐像を置くが，印相は異なり，向かって左が触地印，右が与願印である。さらに両者の間には仏塔の浮彫もほどこされている。台座の左右にも女性像の浮彫がある。いずれもくつろいだ姿で坐り，向かって左の女性は短い杖のようなものを胸の前に掲げ，右の女性は右手を上にあげ，左手で地面に触れている。右手には何か持っているようであるが，明らかではない。これらの女性が特定の尊格であるかは不明である。

オランダのライデン民族学博物館が所蔵する作例[4]は，これまでの3例とは異なり，左手に睡蓮を持たない。髪型は直前のナーランダーの作例に近く，頭頂で髪の束を大きくひとつにまとめ，その房が左肩にまでかかる。装身具は通常どおり，臂釧，腕釧，瓔珞などを付けるが，はじめの2例と同じ大きな丸い耳飾りがここでも現れる。周囲に仏や人物像は現れない。光背にまったく装飾をほどこさないため，作品全体からはプリミティヴな印象を受ける。なお，光背の周囲に銘文が刻まれて

いる。

坐像の最後の作例[5]は，やはりナーランダー出土と伝えられるが，ネパールでの制作を主張する研究者もあり[7]，パーラ朝の作品であるかは検討を要する。15cm程度のブロンズ像で，これまでの作品とは素材も規模も異なる。尊容もこれまでの4例とは共通せず，蓮華坐（padmāsana）で坐り，右手には払子，左手には金剛杵を握る。金剛杵はかなり大きく，鈷の部分が強調された独特の形態を持つ。三山形式の大きな頭飾を付けるため，髪型は不明である。周囲に火炎をあしらった宝珠型の頭光がある他は，光背などは表現されない。

作例数が少ないため，一般的な特徴を抽出するのは困難であるが，はじめの4例にもとづいて金剛手坐像の主要な特徴をまとめておこう。坐法は遊戯坐で，右手に直立した金剛杵を持つ点はいずれにも共通する。第4例をのぞいて左手からは睡蓮が伸び，さらにはじめの2例では金剛杵を載せていた。装身具はほぼ同じ種類のものが認められたが，形態にはばらつきがある。頭髪も渦巻状の髪型と，髪の房を垂らす独特の髪型が見られた。

立像の単独像[6-9]はいずれも10cmから20cm程度の小像に限られる。このうち，3例は左手に直接金剛杵を持ち，右手で与願印を示す。1例[9]のみは右手で施無畏印を示し，上に金剛杵を載せた植物を左手に持つ。金剛杵はやはり直立している。ナーランダーから出土した作品[7]に，大きく髪をまとめた独特の髪型があるが，これを除いて装身具や衣装などに特筆すべき特徴は認められない。

脇侍としての金剛手

単独の坐像で見られた特徴のいくつかは，脇侍として表現された金剛手にも見いだされる。如来像の脇侍菩薩は，パーラ朝の版図では観音と弥勒の組み合わせが大多数を占めるが，金剛手が含まれる作例も4例知られている[8]。対となる脇侍は，1例[13]は確認ができないが，残りの3例はいずれも観音（あるいは蓮華手）である。中心となる如来は3例が触地印仏坐像で，1例[13]が転法輪印を示す倚坐像である。位置は，向かって左に置かれる例が1例[10]で，残りはいずれも向かって右側，すなわち左脇侍として表現されている。

グネリ出土の仏三尊像[10]では，金剛手は右脇侍として坐像で表現される。右手の上には金剛杵を立てて胸の前に置く。左手には睡蓮の茎を執る。写真図版からは細部の装身具などは明らかではないが，髪型は渦巻冠のようである。

転法輪印を示す倚坐の仏陀像の左脇侍の金剛手[13]も，渦巻状に髪を結い，右手

に金剛杵を垂直に置く。ただし，左手に植物は確認できず，持物を持たなかったのかもしれない。また右脇侍も渦巻状の髪型をし，右手に何かを載せている。持物の確認ができないため尊名の比定は困難であるが，観音以外の尊格の可能性もある。

図3　触地印仏坐像　パトナ博物館

パトナ博物館の作品[11]では，金剛手は右手に金剛杵ではなく払子を持ち，左手に睡蓮の茎を執る（図3）。興味深いことに，これまでの作品では，睡蓮の上の金剛杵は一貫して直立した姿で表されてきたが，この作品では睡蓮の上に水平に置かれている。右脇侍の観音も右手に払子を持ち，他の作例に多く見られる与願印や施無畏印を示していない。このような特徴は，次にとりあげるオリッサの蓮華手や金剛手と共通するものである。ただし，オリッサの金剛手に多い円筒形の宝冠は見られず，髪型はこれまでにも登場してきた渦巻冠である。異なる伝統を受け継いだ興味深い作例と見るべきであろう。

ベンガル地方からは独特の様式を持った仏三尊像が出土していることが，宮治氏によって指摘されている[(9)]。その多くは台座に象，獅子，供養者が表され，光背上部には五仏の浮彫がしばしば表現される。通常の脇侍の弥勒が龍華を持ち，標識として頭に仏塔をいただくのに対し，これらの作品では頭飾の仏塔や装身具を付けず，龍華や蓮華の上に水瓶をのせて表現される。もう一方の脇侍である観音は，弥勒と対照的に豪華な装身具を身につけるが，頭前の化仏は弥勒の仏塔にあわせるかのように姿を消す。ボグラ地区出土の三尊像[12]は，これらと同じ特徴の台座と光背を持つ作品であるが，弥勒ではなく金剛手が左脇侍に置かれている。右手に直立した金剛杵を載せるのはこれまでの金剛手と同じであるが，左足に添えた左手には何も持物を持たない。また，弥勒や観音に一般的な髪髻冠を結う点も独特である。

3　オリッサの金剛手

パーラ朝の金剛手と比較しながら，オリッサ州の密教遺跡から出土した金剛手の作例を次に見てみよう。ここからはこれまで9例の金剛手が出土している。坐像が3例で，他はすべて立像である。また，オリッサの西に隣接するマドヤプラデーシ

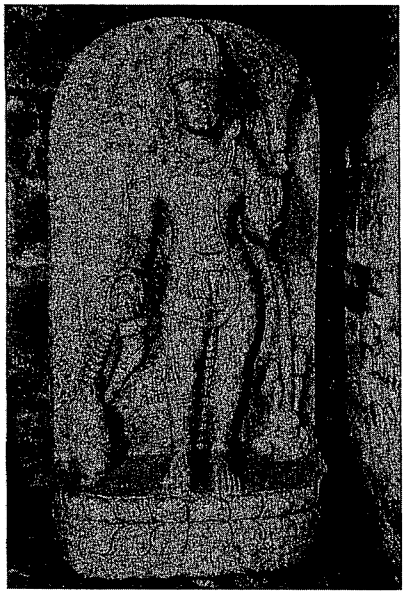

図4　金剛手立像　ラトナギリ僧院跡

ュ州のシルプル遺跡からも2例の金剛手の出土がある。この遺跡からの出土品は，全般にオリッサの作例に近い様式を持つ。[10]

ラトナギリ僧院の本堂の金剛手立像[14]をまずはじめに取り上げよう（図4）。この作品は，僧院の本堂の本尊と考えられる触地印仏坐像の左脇侍として置かれている。対となる蓮華手とともに三尊形式をとるが，それぞれが独立した作品として制作されている。コンダライト石に高浮彫で表現された金剛手は，ほぼ正面を向いて立つ。右手に払子，左手には大地から伸びる睡蓮を執る。睡蓮の上には金剛杵が水平に置かれている。円筒形の宝冠をいただき，耳飾り，首飾り，聖紐，臂釧，腕釧を身につける。前の項で見たパーラ朝の金剛手とは，右手持物の払子，円筒形の宝冠，大地から伸びた睡蓮の上に金剛杵を水平に置くという三点が異なる。

右脇侍の蓮華手にもふれておくと，頭部が化仏を置いた髪髻冠に，また左手の持物が開敷蓮華に変わっている点を除けば，ほとんど左脇侍と同じ特徴を持つ。右手にはやはり払子を握る。仏坐像を中心としたシンメトリカルな印象を見る者に与える。

オリッサ州立博物館にも金剛手[15]，蓮華手の一組の立像が所蔵されている。[11]出土地が同じで，様式，法量とも共通であることから，おそらくラトナギリ僧院と同様，脇侍菩薩として一具のものであったのであろう。金剛手は頭部が欠損しているが，金剛杵を水平に載せた睡蓮が足元から伸び，左手でその茎をとることは確認できる。蓮華手が髪髻冠に化仏をいただき，左手に開敷蓮華を持つ点も，ラトナギリの作例に一致する。

パーラ朝でしばしば現れた二脇侍菩薩を同一のパネルにおさめた三尊形式の作品は，オリッサでは3例に限られているが，いずれも脇侍は蓮華手と金剛手で，3尊を独立させた場合と同じ組み合わせである。パーラ朝で一般的であった観音と弥勒の組み合わせはこの地では見られない。3例のうち2例[25, 26]はラトナギリからの出土で，中央の如来は触地印を示す。残る1例[27]はウダヤギリ大塔の周囲に置かれた4枚のパネルの中の1枚で，蓮華手とともに阿弥陀の脇侍となる。4枚のパ

ネル全体で四仏と八大菩薩が表現されている。[12] これらの作品の金剛手の主要な特徴は，単独の作例とほぼ共通で，頭には宝冠をいただき，右手には払子を，左手には金剛杵をのせた睡蓮を持つ。

ラトナギリの僧院にはもう一組の金剛手[20]（図５），蓮華手の作例がある。本堂入口の左右に置かれたこれらの像は，いずれも四臂像である。金剛手の方はここでも円筒形の豪華な宝冠をいただき，金剛杵を水平に載せた睡蓮を左後手に持つ。残りの持物や印相は，右後手が数珠，右前手が与願印，左前手が水瓶である。水瓶は開いた睡蓮の花の上に置かれているが，この花も左後手の睡蓮と同じ根から伸びている。光背の上部左右には仏坐像が置かれ，また金剛手の足元には向かって右に四臂の忿怒尊，左には両手を口の前に置いた，やせこけた男性がうずくまった姿勢で表現されている。

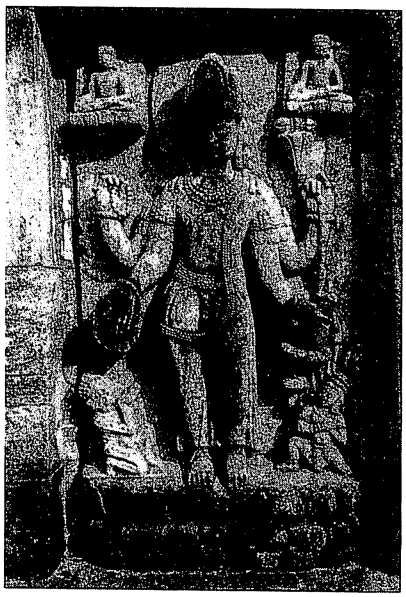

図５　四臂金剛手立像　ラトナギリ僧院跡

これまでの作品と同様に，対となる蓮華手も金剛手とほとんど同じ姿で表現される。[13] 蓮華手の場合，左手に執る植物が開敷蓮華に変わり，宝冠ではなく髪髻冠を結い，化仏をいただく。その他の持物や装身具，さらに周囲の尊格に至るまでまったく同一である。両脇侍の固有の特徴が，左手の植物と頭部の表現にのみ限定されて制作されたことが予想される。

図６　四臂金剛手立像　オリッサ州立博物館

四臂像の金剛手の作例は，オリッサ州立博物館にも１例[21]ある（図６）。バジュラギリ Bajragiri 出土の作品で，おそらく蓮華手と対となった作品と考えられるが，現在のところ蓮華手は発掘されていない。この作例では，金剛杵を水平に載せた睡蓮を持つ手が左後手から右後手に変わり，左後手では梵夾のようなものを持つ。右前手は欠落しているが，払子と思われる持物の一部がわずかに残っている。左側の足元に

は四臂の忿怒尊が立ち，金剛手の左前手はその頭にてのひらを置く。前例と同じ忿怒尊であるが，前の例では交差させていた主要な二臂をここでは胸の前で合掌させる。いずれも恭順を示すポーズであろう[14]。右側の足元にはこの作品では女性の坐像が表現されているが，胸の前に金剛杵を直立させて持つ点が注目される[15]。この作品でもう一つ特異なのは，頭に宝冠をいただかず，頭頂で髪を一つにまとめ，その上に大きな髪の房を作る，独特の髪型を示す点である。このような髪型はナーランダー出土の金剛手立像[7]にも見られ，また，坐像のところで取り上げた，やはりナーランダー出土の初期の金剛手坐像[3]やライデン博物館の作例[4]がとっていた髪型とも共通する。オリッサの金剛手で宝冠をいただかない作例は，この四臂像のみである。

ラリタギリからは3体の金剛手がこれまで出土しているが，金剛杵を水平に載せた睡蓮と頭部の宝冠というふたつの特徴は，いずれの作品でもはっきり確認できる。このうち，2例[16，17]は八大菩薩のセットの中の一体と考えられるが，蓮華手と脇侍を組まない場合でも，固有の特徴は保持されていたことが知られる。これらはいずれも立像の作品で，残りの1例[18]は遊戯坐をとる。インド博物館所蔵の立像[16]は2m近い大作で，この地区から出土した優れた作品の一つとして有名である（図7～9）。現在は右腕が欠損しているが，Sahu(1958: Fig. 36)の紹介する図版では与願印を示していた。遊戯坐をとる作例も，右手は与願印を示す。いずれの作品も足元や体の両側に女性像が表現されるが，これはラリタギリやラトナギリ出土の菩薩にしばしば見られる特徴である。ただし，ラリタギリ収蔵庫に置かれた立像[17]（図10）の向かって右側の女性（図11）は，金剛杵を右手に握っている。持ち方は異なるが，オリッサ州立博物館の四臂像の金剛手の足元の女性が金剛杵を持っていた点に共通する。

これまで見てきた作品では，いずれも金剛杵は睡蓮の上に水平に置かれるか，女性の従者が持つだけで，金剛手自身が手にすることはなかった。しかし，パーラ朝の金剛手に共通してみられた，直立した金剛杵を胸の前に保つというスタイルが，この地域にまったく知られていなかったわけではない。ウダヤギリから発掘され，現地の僧院本堂に置かれている金剛手坐像[19]は，良好な保存状態の作品である（口絵3）。遊戯坐でゆったりと坐り，右手を胸の前に置いて，その上に直立した金剛杵を載せている。左手は左足の背後に置き，ここから睡蓮が伸びていたようであるが，茎の部分は現在は欠損している。注目すべきは，この睡蓮の上に，他のオリッサの作品では必ず見られた金剛杵が置かれていないことである。これらの特徴

図7　金剛手立像　インド博物館

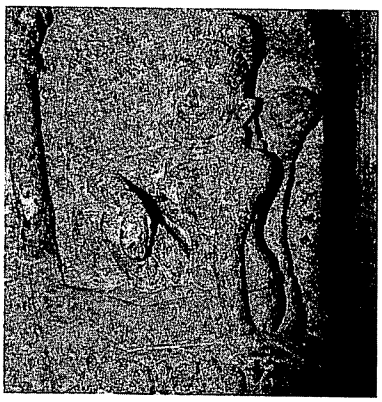

図8　図7部分

図9　図7部分

図10　金剛手立像　ラリタギリ現地収蔵庫

図11　図10部分

を見ればナーランダー出土の初期の金剛手坐像とほとんど変わらないのであるが，オリッサの金剛手のもう一つの特徴である円筒形の宝冠が，この作品でもひときわ大きく表現されている。装身具に関してはオリッサの金剛手の伝統に属しながらも，持物についてはパーラ朝の金剛手に見られた特徴を合わせ持つという興味深い作例といえよう。

宝冠をいただき，金剛杵を載せた睡蓮を左手に持つというオリッサの金剛手のスタイルは，おそらく西インドの石窟寺院の伝統を受け継いだものであろう。パーラ朝以前の金剛手に関しては，石黒氏の研究（1985）に詳しい。これによれば，三鈷杵を載せ，大地から伸びた睡蓮（あるいは蓮華）を手にする金剛手がはじめて登場するのは，エローラの第11窟である。また，密教尊像の多い第12窟では金剛手の作例も増え，その多くが宝冠を付ける。金剛杵を載せた睡蓮を左手に持つ点も同じである。ただし，これらの作例では金剛杵は水平ではなく，垂直に睡蓮の上に置かれている。睡蓮の上に水平に金剛杵が置かれるのはオリッサ独自のスタイルである。また，これらの作例はいずれも仏の左脇侍として制作され，右脇侍には蓮華を持った観音（蓮華手）が置かれている。そして，両者ともに脇侍にふさわしく払子を持つことが多い。エローラとならぶ代表的な石窟寺院アジャンターにも金剛手の作例はいくつか知られている。ここでも仏の左脇侍に表されることが多いが，持物の睡蓮は未だ現れず，右手には払子，左手には直接金剛杵を握る。[16]

金剛手を含むオリッサの三尊形式がエローラやアジャンターに代表される西インドの石窟寺院と関係があることは，すでにこれまでも指摘されている。[17] オリッサの金剛手には，睡蓮上の金剛杵の向きや，四臂像への展開といった独自性も認められるが，大局的にはグプタ朝やポスト・グプタ期の仏教美術の伝統の中にあるとみてよいであろう。そして，同じ金剛手でありながら，オリッサのそれとはかなり異なった姿で表現されるパーラ朝の金剛手は，いわば新しい時代の産物なのであって，オリッサに至る金剛手の図像上の伝統とは明確な相違を呈する。しかし，ウダヤギリの金剛手[19]とナーランダーの初期の作品[3]に認められる共通性や，パトナ博物館の脇侍の金剛手[11]に見られるような一種の折衷性は，両地域の断絶が必ずしも決定的なものでなかったことも示している。

4　金剛薩埵の図像学的特徴

ビハール・ベンガル地方からの金剛薩埵の作例は10例ある。はじめにこれらの作品に共通して認められる金剛薩埵の一般的な特徴をまとめておこう。

金剛手の場合，坐像は遊戯坐の姿勢をとったが，金剛薩埵は多くの場合，半跏坐(ardhaparyaṅka)で坐る。また，一部の作例では仏と同じ結跏趺坐で表現されている。遊戯坐が菩薩に一般的な坐法であるのに対し，右足のみ左足の大腿にのせ，左足は組まずにその下に置く半跏坐は，仏陀の坐法である結跏趺坐に近い坐法である。結跏趺坐が仏の悟りの象徴とすれば，遊戯坐は未だ悟りを開かず，世俗にあって衆生の救済をめざす菩薩にふさわしい坐法といえよう。金剛薩埵がしばしば半跏坐をとるのは，通常の菩薩よりも仏に近いというこの尊の中間的存在を示す。

図12 金剛薩埵坐像　サールナート博物館

持物は例外なく，右手に金剛杵，左手に鈴を持つ。右手は金剛手と同様に胸の前に置き，この上に直立した金剛杵をのせる。左手は腰のあたりに付けて，鈴の上部を握っている。丸い大きな耳飾り，豪華な首飾り，臂釧，腕釧，聖紐，装飾性の高い腰帯などで身を飾り，ドーティをまとうことは金剛手に同じである。

髪型は1例を除き，いずれも渦巻冠をとる。額には頭飾を付け，左右に冠帯をひるがえすことが多い。渦巻冠をとらない例外はサールナートから出土した，おそらくポスト・グプタ期に属する作品[28]で，宝冠をいただき，その正面に二体，左右に一体ずつ，合計四体の仏坐像の浮彫をほどこす（図12)。印相は正面の二尊と向かって左の尊が定印で，右が転法輪印であるため，密教系の四仏の可能性は低い[18]。

大英博物館のインド・ギャラリーに，ビハール州出土の金剛薩埵坐像[29]が展示されている（口絵 4)。等身大のかなり規模の大きな作品で，頭髪は通常の金剛薩埵と同様，渦巻冠であるが，化仏の位置に二体，その左右に一体ずつ合計四体の仏坐像が表現されている。正面の二体のうち，上は転法輪印，下は触地印，向かって左は与願印，右は施無畏印を示しているように見える。順に大日，阿閦，宝生，不空成就を表したものかもしれない。この作品は，光背の周囲に火炎と連珠の他に，金剛杵を連ねた文様が浮彫で表現されている。他にあまり例を見ない様式で，金剛薩埵の属する金剛部を表現しているとも考えられる。台座には銘文が刻まれ，三頭の獅子も表現されている。

金剛薩埵の作例で注目すべきものとして，4尊の供養菩薩が光背の左右と台座の

左右の4箇所に表現されている作品がある。おそらくガヤ地区で出土し，現在アメリカ合衆国にある作品[36]と，ナーランダー博物館が所蔵する比較的小規模の作品[37]の2点がこれまで確認されている。頼富氏らが指摘するように，これらはおそらく『金剛頂経』系のマンダラに現れる供養菩薩と考えられる[19]。向かって左上の尊は華鬘を持つことから，金剛華と見て間違いないであろう。これは両作品に共通である。右上の尊は，1例では灯明の台らしきものを両手に持っているので，金剛燈と考えられる。ただし，もう1例では帯状のものを両手で広げ，同一の尊であるかは確認できない。残りの2尊はそれぞれ特徴的な姿勢をとるが，持物等の詳細は不明で，尊名の比定は困難である。外の四供養菩薩を右回りに配したのであれば，向かって左下が金剛香，右下が金剛塗になる。このような四供養菩薩はウダヤギリ出土の金剛界大日の坐像にも見られ，金剛頂経系の一種のマンダラ表現がかなり広く行われていたことを予想させる[20]。

金剛手に関してはパーラの作品と著しい対比を示したオリッサで，金剛薩埵はどのように表現されているのであろう。ラトナギリ遺跡では，胎蔵大日を本尊とする祠堂において，その右脇侍の位置に置かれ，金剛法菩薩と向かい合った金剛薩埵像[38]が有名である。他の二尊に比べると磨滅，欠損が著しいが，基本的な特徴は確認できる。右手は胸の位置で直立する金剛杵を保ち，左手は腰に当てる。ここには金剛鈴を持っていたはずである。半跏で坐り，頭髪は渦巻冠である。ラトナギリにはこのほかには，奉献小塔の龕の中の作品として，7例の金剛薩埵の図版が紹介されている[21]。これらの作例はいずれも小品のため，細部の確認は困難であるが，祠堂の金剛薩埵と共通の持物をほぼ同じポーズで持っているようである。渦巻冠，半跏という特徴も共通である。ただし1例[49]は半跏ではなく，結跏趺坐をとる。オリッサのサレムプール Salempur からは，比較的，保存状態の良い金剛薩埵像が2例[39, 40]出土している。いずれも渦巻冠の頭髪をはじめ，持物，装身具など，これまで述べてきた金剛薩埵と同じ特徴を示すが，坐法のみは両作品とも半跏ではなく結跏趺坐を組む。このほかプリー Puri 地区のアチュトラジュプール Achutrajpur からも多くの金剛薩埵のブロンズ像が出土しているが，このうち少なくとも3点[51-53]は結跏趺坐で坐る。坐法に関しては，オリッサでは半跏と結跏趺坐の両者が共存している。

5 まとめと考察

金剛手と金剛薩埵についてビハール・ベンガルとオリッサから出土した実際の作

例を概観してみた。この中で独特の特徴をそなえていたのがオリッサの金剛手である。蓮華手とともに仏の脇侍となり，左手には大地から伸びた睡蓮を持つ。睡蓮の上には自分のシンボルである金剛杵が水平に置かれている。1例を除き円筒形の宝冠をいただき，右手に払子を持つ例も多い。睡蓮上の金剛杵の向きをのぞき，これらの特徴はグプタ朝からポスト・グプタ期にかけて造像活動の栄えた西インドの石窟寺院の金剛手からおそらく受け継いだものであろう。オリッサの仏教遺跡は，現在もなお発掘が進められ，その全貌は未だ明らかではないが，パーラ朝に比べるとその作風は古風で，インドにおける密教美術の成立を考える上で，重要な位置を占める。ただし，宝冠をかぶる金剛薩埵はサールナートでも1例あり，またパーラ朝の金剛手の類例がウダヤギリにも見られることから，ガンジス川流域との交流も考えられる。

パーラ朝ではおもにビハール州からの金剛手，金剛薩埵の作例が多い。金剛手は遊戯坐で坐り，右手は胸の前で直立した金剛杵を保ち，左手は睡蓮の茎を執る。睡蓮の上には金剛杵が表現される場合もあるが，オリッサとは異なり，むしろエローラの金剛手と同じように垂直に置かれる。身体表現や装身具では，渦巻状の髪型と丸い大きな耳飾りが特徴的である。金剛薩埵の場合，半跏坐で坐り，左手の持物が睡蓮から金剛鈴に変わり，腰の位置に保つ。この点を除けば金剛手とのあいだにほとんど相違はない。多くの図像学的特徴を両者が共有しているとみてよいであろう。このような金剛薩埵の特徴はオリッサでも一般的である。いくつかの作品で坐法が結跏趺坐となる以外は，ビハールとオリッサの金剛薩埵の差異はほとんど認められない。見方をかえれば，ビハールとオリッサの金剛手と金剛薩埵の中では，オリッサの金剛手のみが古いスタイルで表現され，それ以外はほぼ共通の特徴で表現されているのである。

それでは，金剛手と金剛薩埵の図像上の類似性は，両者の教学上の同体関係に基づくものであろうか。確かに，両者の親密性は経典や文献の中でも明瞭であるが，類似の理由は必ずしもそれだけではないと考えられる。というのは，金剛手や金剛薩埵に見られる共通の特徴は，他の菩薩一般にも見られるものだからである。その事例として八大菩薩の作例を取り上げよう。

八大菩薩の作例ははやくはエローラの第11窟において見いだされ，その後もオリッサやビハールで受け継がれた。ビハール州では少なくとも4セットの八大菩薩の作例が遺されている[22]。このうち，ニューデリーの国立博物館所蔵の作例（図13，14）をやや詳しく見てみよう。横長の石版パネルに8尊の菩薩を横一列に浮彫で表現し，

図13 触地印仏と八大菩薩（部分）
ニューデリー国立博物館

図14 触地印仏と八大菩薩（部分）
ニューデリー国立博物館

その中央に触地印の仏坐像を置く。8尊の中で尊名の確実なものは，左から3番目の文殊，4番目の観音，仏坐像をはさんでその右の弥勒，さらにその右の金剛手である。これらの尊の比定は髪型や持物にもとづく。すなわち，文殊は髻を結い，睡蓮を持ち，観音は髪髻冠に蓮華，弥勒はやはり髪髻冠と龍華を持つ。金剛手は手に直立した金剛杵を持つ。残りの4尊はそれぞれ特徴的な持物を持つ以外は，髪型や坐法などに違いはない。尊名が決定できないのは，持物と尊格との対応が研究者の間で必ずしも一致しないためである[23]。そして，これらの4尊に金剛手を加えた5尊に共通して認められる特徴が，すでに見てきた金剛手と金剛薩埵に一般的な渦巻冠と丸い大きな耳飾りなのである。

インドにおいて長い図像伝統を持つ観音，弥勒，文殊がそれぞれ固有の特徴をそなえていることはよく知られている。この八大菩薩にもそれは髪型や持物の植物に明瞭に表されている。しかし，金剛手を除く残りの4尊は，インドではそれまでほとんど作例が知られていない菩薩たちである。渦巻冠と丸い耳飾りは，図像の伝統を持たないこれらの菩薩にあらたに与えられた特徴だったと考えられる[24]。持物というシンボルが明確に表現されていれば，菩薩の髪型や装身具は統一的な形態に還元することが可能であるという，密教の「シンボル万能主義」がその背景にあるといってもよいであろう。金剛手の場合，これらの4尊とは異なり，ガンダーラ以来，インドで連綿と制作され続けた尊格である。しかし，その伝統はエローラとそれを受け継いだオリッサで途絶え，パーラ朝の金剛手とは断絶がある。そして，パーラ朝の金剛手を表現するために採用された特徴は，金剛薩埵も含む不特定多数の密教の菩薩を表現するもっとも一般的な形態であったと考えられる。

〈註〉

(1) ただし，『真実摂経』では十六大菩薩の上首菩薩としては「金剛薩埵」の名称は確立しておらず，「金剛手」の名称が経典を通じて用いられている。十六大菩薩の上首菩薩は『金剛頂経』第一品「金剛界品」の冒頭の出生の段では，はじめは「普賢」の名で呼ばれ，一切如来から灌頂を受けた後に「金剛手」の名が与えられる（堀内1983：32-40)。この部分では「金剛薩埵よ」というマントラが現れるが，尊名として用いられているかどうかは明確ではない。

(2) 石黒（1985：181)。この段落の以下の記述も石黒氏の研究にもとづく。

(3) この脇侍菩薩を金剛手と見るかどうかは意見が分かれる。肥塚（1985：279)，頼富（1990：621）参照。

(4) パーラ朝期の金剛手と金剛薩埵についてはすでに頼富氏による詳細な研究がある（1982)。またインド仏教美術史における金剛手の図像上の変遷については前掲の石黒氏の論文が有益である。このほか頼富・下泉（1994：90-91）でも金剛手は取り上げられている。なお，本稿は名古屋大学教授宮治昭氏を中心としたパーラ朝の仏教美術に関する研究会の研究成果の一部で，菩薩の中でも観音，文殊，弥勒に次いで作例の多い金剛手と金剛薩埵に関するものである。同研究会のこれまでの成果には，宮治（1993，1995)，森雅秀（1990，1996)，森喜子（1990-1992)，佐久間（1991，1992)，佐久間・宮治（1993）がある。このうち佐久間（1991-1993）の観音のリストには同一作品を重複して数える誤りがいくつか含まれる。筆者が気がついたものを以下に示す。A-S1-M1-I-46＝A-S1-M1-I-69; A-S1-M1-I-1＝A-S1-M1-I-7; A-S1-M1-I-31＝A-S1-M1-I-33; A-M2-3＝A-M2-6; B-S2d-5＝B-S1-S2a-S2d-M1-10; C-Sl-M1-12＝C-S1-Ml-6; A-S1-M1-I-64＝A-X-I-21; A-S1-M1-I-6＝B-M1-1; B-S1-S2a-M1-1＝B-S1-S2a-Ml-8; B-S1-S2a-M1-5＝B-2; B-Sl-S2a-Ml-10＝B-S2a-S2e-P5-1。このほか A-S1-M1-I-19 のHuntington（1984：Pl. 253）は文殊，A-X-1-11 は弥勒，A-X-II-14 は除蓋障である。

(5) [　] 内の数字は後掲の作例リストの通し番号を示す。

(6) インド博物館所蔵のマンジュヴァラ坐像と，人物の表現方法やモデリング，また台座の獅子，蓮台の表現などがよく似ている。森（1996：作例 No. 18，図１）参照。

(7) Ray *et al*（1986：42）参照。

(8) ２菩薩を脇侍とする如来像については宮治昭氏による詳しい論考がある（1993)。それによれば観音と弥勒を脇侍とする作例は，現在のところ50点近く知られている。

(9) 宮治（1993：26-27)。宮治氏のリストでは III-1-11～13，III-3-7。このほか図版未発表であるが，ヴァレーンドラ博物館 Varendra Museum 所蔵の触地印仏坐像（Acc. No. 250）と転法輪印仏坐像（Acc. No. 267）もこれに該当する。

(10) シルプル遺跡については頼富（1991）参照。

(11) 蓮華手は森（1997：リスト17，図29）において紹介した。

(12) この作品については頼富（1992b）に詳しい考察がある。

(13) 図版は Saraswati（1977：1. 63)，佐和（1982：口絵８）など。

(14) 腕をくむ男尊が恭順を示すことは頼富（1982：41）に言及があり，蘇婆呼童子の可能性が示唆されている。

(15) 胎蔵マンダラの金剛手院の構成から，金剛杵を持つこの女性がマーマキーの可能性があることを田中公明氏よりご指摘いただいた。

(16) 頼富（1982：38-39）参照。

(17) 頼富（1982：38-43)，石黒（1985：189）参照。

(18) 金剛薩埵が仏の宝冠を付けるのは，チベットやネパールで一般的となるが，その根拠も『真実摂経』の金剛薩埵（金剛手）の出生段に求められる（堀内 1983 : 40）。

(19) 頼富・下泉（1994 : 274）

(20) 頼富（1992a : 115-116）。頼富氏はこの論文の中で，全体を内の四供養菩薩と比定し，向かって左上の女尊を金剛鬘，向かって右上の菩薩を金剛歌とするが，おそらく金剛薩埵の作例と同様，金剛華，金剛燈であろう。また，台座左右にも二女尊が坐り，向かって左は金剛香（細長いものを持つ），向かって右は金剛塗（ほら貝を持つ）と考えられる。この作品については宮治（1995 : 18）にも言及があり，同様に外の四供養菩薩に同定する。

(21) 佐和（1982 : 164）によれば，奉献小塔の龕の中の金剛薩埵の作例は15例ある。

(22) ここで取り上げるニューデリーの国立博物館の作品の他に，パトナ博物館（頼富 1990 : 図81），ナーランダー博物館（佐和 1983 : 125，挿図100），そしてカルカッタ大学構内のアストシュ博物館 Asutosh Musuem（Acc. No. 755 ; Banerjee 1994 : Pl. 31）にそれぞれ 1 点ずつ所蔵されている。なお，エローラの八大菩薩については伊東（1981），Malandra（1993），ビハール州に関しては頼富（1990 : 616-617），Banerjee（1994）参照。

(23) 文献の記述によれば，普賢と虚空蔵はいずれも剣を持物とし，また，幢幡も地蔵，除蓋障に共通する。作例では剣，幢幡，三つの蕾を付けた植物，先端に宝珠のようなものを付けた植物という持物の区別が，これらの 4 尊に対応する菩薩に与えられている。頼富（1990 : 610-612）参照。なお，これらの点については1993年10月17日に名古屋大学文学部美学美術史研究室で行われたパーラ朝美術研究会における山田耕二先生のご発表によっている。

(24) このうち，丸い大きな耳飾りは文殊や，その図像上のモデルとなったカールティケーヤにも共通して現れる。また，パーラ朝の文殊は一般には髻を結った髪型で表されるが，渦巻冠をした作例が少なくとも14例存在する（森1996 : 作例リスト 1, 2, 12-14, 16, 18, 20, 83-85, 87, 103, 119）。これらの作例の大多数はふたつのグループに分類することができる。一つはマンジュヴァラと呼ばれる独特の文殊で，ベンガル地方から多くの作例が出土している。もう一つのグループはナーランダーから発掘された文殊像である。このうち，後者が八大菩薩の渦巻冠と関係を持っているのではないかと筆者は考えているが，それは文殊の髪型の流用ではなく，反対に，新しい菩薩のスタイルの一つとしてこの髪型が，文殊をも巻き込んで浸透していったと予想する。ちなみに，注(22)のアストシュ博物館の八大菩薩のセットでも，文殊は渦巻冠で表現されている。

附録　パーラ朝期の金剛手・金剛薩埵の作例リスト

凡例

番号　(1)　**尊名**

(2)　**出土地；所在あるいは所蔵者**

(3)　**データ**　材質，年代，法量等。

(4)　**出典**　著者名，刊行年，図版番号の順に記載。複数の文献に含まれる場合，刊行年代順とする。76YM，MY83 で始まる番号は，名古屋大学古川研究資料館収蔵の図版整理番号で，宮治昭名古屋大学教授・山田耕二名古屋芸術大学教授の撮影による。

(5)　**図像学上の特徴等**　印，持物，装身具，坐法，光背，台座，保存状況等について記載。ただし，すでに本文で言及されているものは重複を避けた。

1～13　金剛手（ビハール・ベンガル）
14～27　金剛手（オリッサ）
28～37　金剛薩埵（ビハール・ベンガル）
38～54　金剛薩埵（オリッサ）

金剛手（ビハール・ベンガル）

1 (1) Vajrapāṇi
(2) Indian Mus., Calcutta, Acc. No. 3805/A25139
(3) Stone, *ca.* 9c (Saraswati)
(4) 76YM 小118-19; MY83 小148-29, 30 [図1]

2 (1) Vajrapāṇi
(2) Nālandā; National Mus., New Delhi
(3) Stone, *ca.* 9c (Saraswati)
(4) 76YM 小111-12; Saraswati 1977: Pl. 89
(5) 連珠紋の縁飾りの光背。台座向かって右端に女性像。Avalokiteśvara (Saraswati), Padmapāṇi (Mus.).

3 (1) Vajrapāṇi
(2) Nālandā; Nālandā Mus.
(3) Stone, *ca.* 10c (Saraswati)
(4) 76YM 大 62-11; 76YM 小 109-15; Banerji 1933: PL. XXXVII(a); Saraswati 1977: Pl. 166 [図2]
(5) 台座最下段に銘文。

4 (1) Vajrapāṇi
(2) Bihar; National Museum of Ethnology, Leiden, No. 3840-1
(3) Stone, 9c (Raven & van Kooij)
(4) Raven & van Kooij 1992: Fig. 52

5 (1) Vajrapāṇi
(2) Nālandā?; National Mus., New Delhi, Acc. No. 47. 38
(3) Bronze, 15.2cm ht., *ca.* 11c (Saraswati; Pal), 10c (Ray)
(4) 76YM 小82-32; MY83 小123-15; Pal 1974: Fig. 205; Saraswati 1977: Pl. 167; Ray *et al* 1986: Pl. 180

6 (1) Vajrapāṇi
(2) 出土地不明; National Mus., New Delhi
(3) Bronze
(4) 76YM 小82-33
(5) 右手与願印，左手は胸の前で金剛杵を持つ。

7 (1) Vajrapāṇi
(2) Nālandā; Nālandā Mus., Acc. No. 00133
(3) Bronze, 10cm ht., 8 c 後半 (Ray)
(4) Ray *et al* 1986: Pl. 51
(5) 髪は大きく一つに結わえる。円形の大きな耳飾り，瓔珞，聖紐，ドーティを身に付ける。右手与願印，左手は金剛杵を持つ。宝珠型の頭光。

8 (1) Vajrapāṇi
(2) Nālandā; Nālandā Mus.
(3) Bronze
(4) 76YM 小110-19
(5) 右手与願印，左手は金剛杵を持つ。磨滅著しく，細部不明。

9 (1) Vajrapāṇi
(2) Kurkihār, Gaya Dt., Bihar; Patna Mus. Acc. No. 9816
(3) Brass, 16.5cm ht., 10c (Schroeder)
(4) Schroeder 1981: Pl. 65F
(5) 円錐形の髪髻冠。冠飾，円形の大きな耳飾り，瓔珞，聖紐，臂釧，腕釧，ドーティを身に付ける。火炎紋を周囲に飾る舟形光背。

10 (1) Vajrapāṇi
(2) Guneri, Gaya Dt., Bihar; 現地？
(3) Black stone, *ca.* 10c (Huntington)
(4) Huntington 1984: Pl. 118; 宮治 1993: リスト III-1-9
(5) 触地印仏座像の右脇侍。台座に銘文。

11 (1) Vajrapāṇi
(2) 出土地不明; Patna Mus., Acc. No. 11339
(3) Black stone, 9c (Mus)
(4) [図3]
(5) 触地印仏座像の左脇侍。右脇侍は蓮華手（あるいは観音）。光背上部左右に二飛天。台座最下段に銘文。

12 (1) Vajrapāṇi
(2) Matrai, Bogra; Mahasthangarh Mus.
(3) Black stone, 74×66cm
(4) Alam 1985: Fig. 77
(5) 触地印仏座像の左脇侍。右脇侍は観音（あるいは蓮華手）。光背上部に五仏の浮彫。印相は向かって左より転法輪印，与願

印，触地印，定印，施無畏印。台座には象，獅子，供養者，供物が表現される。

13 (1) Vajrapāṇi
(2) Nālandā; Nālandā Mus.
(3) Black stone, *ca.* 10c (Huntington)
(4) Huntington 1984: Pl. 132; 宮治 1993: リスト III-2-3
(5) 倚坐をとる転法輪印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音(？)。立像。渦巻状の髪型。胸の前で金剛杵を持つ。光背上部左右に仏塔の浮彫。台座左右に獅子の浮彫。Huntington は主尊が弥勒仏である可能性も示す。

金剛手（オリッサ）

14 (1) Vajrapāṇi
(2) Ratnagiri; 現地僧院跡
(3) Stone
(4) Saraswati 1977: Pl. 165; Bénisti 1981: Fig. 164; 佐和 1982: 挿図81，図15; 頼富 1991: 図12 [**図 4**]

15 (1) Vajrapāṇi
(2) Khadipada, Barasore; Orissa State Mus.
(3) Stone; 137×57cm
(4) 森 1997: 図30，No. 18
(5) 立像。頭部，両腕，光背向かって左上欠損。瓔珞，聖紐，条帛，臂釧，腕釧，ドーティを身に付ける。右手持物不明，左手はおそらく睡蓮の茎を持つ。

16 (1) Vajrapāṇi
(2) Lalitagiri; Indian Mus., Calcutta, Acc. No. 6953/A24135
(3) Stone, 10c (Mus)
(4) 76YM 大66-15; 小120-3, 4; MY83 小152-20～23; Sahu 1958; Figs. 36, 41; 佐和 1982: 挿図12, 図125; 岩宮 1989: 図213; 頼富 1990: 図73 [**図 7～9**]
(5) 立像。右腕，光背上部左右欠損。円筒形の宝冠。垂髪。耳飾り，瓔珞，聖紐，臂釧，腕釧，ドーティを身に付ける。左手は睡蓮の茎を持つ。睡蓮は大地から伸び，花の上に水平に金剛杵を載せる。体の右側にも睡蓮が伸びる。左右に輪王坐で蓮台に坐る女性。いずれも体の横に睡蓮が伸びる。周囲に火炎を配した光背。八大菩薩のセットの中の一体。

17 (1) Vajrapāṇi
(2) Lalitagiri; 現地収蔵庫
(3) Stone
(4) 佐和 1982: 図123 [**図10，11**]
(5) 立像。両腕，光背上部向かって左側欠損。円錐形の宝冠。垂髪。耳飾り，瓔珞，聖紐，臂釧，ドーティを身に付ける。左手はおそらく睡蓮の茎を持つ。睡蓮は大地から伸び，花の上に水平に金剛杵を載せる。体の右側にも睡蓮が伸びる。向かって左に結跏趺坐の女性。体の左側に睡蓮が伸び，直立した金剛杵を花の上に載せる。向かって右に輪王坐の女性。右手に金剛杵を持つ。いずれも蓮台に坐る。光背上部向かって右に飛天。八大菩薩のセットの中の一点。

18 (1) Vajrapāṇi
(2) Lalitagiri; 現地収蔵庫
(3) Stone
(4) 佐和 1982: 図120
(5) 遊戯坐。円筒形の宝冠。垂髪。耳飾り，瓔珞，聖紐，条帛，臂釧，腕釧，ドーティを身に付ける。右手与願印。左手は座の上に置き，そこから睡蓮が伸びる。花の上に水平に金剛杵を載せる。両側に女性立像。いずれも円形の耳飾りと，連珠の首飾りを付け，右手に払子，左手に植物のようなものを持つ。光背上部左右に飛天。台座左右に獅子。

19 (1) Vajrapāṇi
(2) Udayagiri; 現地僧院跡
(3) Stone
(4) [**口絵 3**]
(5) 左手に持つ睡蓮の茎の部分は欠損。光背上部左右に円錐形の帽子をかぶった飛天。台座に供物と供養者の浮彫。宝珠型の頭光の浮彫。頭光周囲に銘文。

20 (1) Vajrapāṇi
(2) Ratnagiri; 現地僧院跡
(3) Stone, 122×66cm
(4) Saraswati 1977: Pl. 64; Mitra 1981: Pl. CIX(A); 佐和 1982: 挿図82，図10 [**図 5**]
(5) 光背上部左右に仏坐像。印相は向かって左が触地印，右が与願印。

21 (1) Vajrapāṇi
(2) Bajragiri; Orissa State Mus.
(3) Stone, 139cm ht.
(4) 森 1997: 図 3，31-34, No. 19 [**図 6**]

22 (1) Vajrapāṇi
(2) Sirpur, Raipur Dt., Madhya Pradesh
(3) Bronze
(4) Bandyopadhyay 1981 : Pl. 46
(5) 遊戯坐。右手与願印。左手は座の上に置き，そこから睡蓮が伸びる。周囲に火炎と連珠を配した円形の光背。

23 (1) Vajrapāṇi?
(2) Sirpur, Raipur Dt., Madhya Pradesh
(3) Stone
(4) 頼富 1991 : 図 9
(5) 立像。腰から上のみ残存。両腕欠損。右手は胸の前に置く(？)。宝冠。

24 (1) Vajrapāṇi
(2) Ratnagiri
(3) Stone
(4) Mitra 1981 : Pl. LXXII(A)
(5) 遊戯坐。右手与願印。左手は金剛杵を水平に載せた睡蓮を持つ。奉献小塔の龕中の浮彫。

25 (1) Vajrapāṇi
(2) Ratnagiri
(3) Stone, 73.6cm, *ca.* 8c (Saraswati)
(4) Saraswati 1977 : Pl. 195 ; Mitra 1981 : Pl. CXXXVI(B) ; 佐和 1982 : 口絵 6，図 20 ; 頼富 1982 : 図11
(5) 触地印仏坐像左脇侍。右手に払子，左手は大地から伸びる睡蓮を持つ。睡蓮の上には水平に金剛杵を載せる。髪型は髪髻冠のような形をするが，詳細は不明。耳飾り，首飾り，臂釧，腕釧，ドーティを身につける。右脇侍は蓮華手。光背上部左右に仏坐像。印相は向かって左が与願印，右が定印。台座中央に蓮華，左右に獅子の装飾。

26 (1) Vajrapāṇi
(2) Ratnagiri
(3) Stone
(4) Mitra 1981 : Pl. CXXXVII(B) ; 佐和 1982 : 図21
(5) 触地印仏坐像左脇侍。右手に払子，左手は大地から伸びる睡蓮を持つ。睡蓮の上には水平に金剛杵を載せる。宝冠。耳飾り，首飾り，臂釧，腕釧は確認できる。右脇侍は蓮華手。光背上部左右に飛天。台座に供物と帰依者。

27 (1) Vajrapāṇi
(2) Udayagiri ; 大塔
(3) Stone
(4) 頼富 1992b : 図 4
(5) 定印仏坐像（阿弥陀）左脇侍。右手に払子，左手は大地から伸びる睡蓮を持つ。睡蓮の上には水平に金剛杵を載せる。髪型不明。耳飾り，首飾り，聖紐，臂釧，腕釧を付ける。仏塔の西に配置。

金剛薩埵（ビハール・ベンガル）

28 (1) Vajrasattva
(2) Sarnath; Sarnath Mus.
(3) Sand Stone, 4' 7½" ht., 8-9c (?) (Encyclopedia fo World Art)
(4) 76YM 大 57-15 ; 76YM 小 92-2 ; 76YM 小96-7 ; MY83 小140-7 ; Encyclopedia of World Art, VII, Pl. 461 ; 宮治 1981 : 37 ; 頼富・下泉 1994 : 90 **[図12]**
(5) 結跏趺坐。右手は胸の前に置き，直立した金剛杵を載せる（ただし右手首欠損）。左手は腰のあたりに金剛鈴を保つ。光背上部左右に飛天。円形の頭光の浮彫。

29 (1) Vajrasattva
(2) Bihar; British Mus.
(3) Black stone
(4) **[口絵 4]**
(5) 半跏坐。右手は肘より先欠損。胸の部分に右手の跡のみ残る。光背上部左右に仏塔の浮彫。

30 (1) Vajrasattva
(2) Nālandā ; Indian Mus., Calcutta, No. 3785
(3) Black stone, 50cm ht., *ca.* 10c (Saraswati)
(4) 76YM 大 66-7 ; 76YM 小 118-29 ; MY83 小 149-18 ; Foucher 1900 : Fig. 19 ; Banerji 1933 : Pl. XV(a) ; Saraswati 1977 : Pl. 156
(5) 半跏坐。右手は胸の前に置き，直立した金剛杵を載せる。左手は腰のあたりに金剛鈴を保つ。渦巻型の髪型。三山形式の冠飾。ビーズ状の円形の耳飾り，瓔珞，臂釧，腕釧，聖紐，ドーティを身に付ける。光背左右にマカラと馬（グリフォン）の浮彫。台座中央と左右に合計四体の象。中央の二頭は鼻をつなげる。

31 (1) Vajrasattva
(2) Nālandā ; Indian Mus., Calcutta

(3) Black stone, *ca.* 10c (Saraswati)
(4) 76YM 小 111-19; Saraswati 1977: Pls. 157, 159
(5) 半跏坐。右手は胸の前に置き，直立した金剛杵を載せる。左手は腰のあたりに金剛鈴を保つ。渦巻型の髪型。円形の大きな耳飾り，瓔珞，臂釧，腕釧，聖紐，ドーティを身に付ける。台座左右に獅子の浮彫。Saraswati は Pl. 157 と Pl. 159 を別個の作品とするが，おそらく同一の作品。

32 (1) Vajrasattva
(2) Bodh Gayā Mahābodhi temple
(3) Stone, 121cm
(4) Leoshko 1995: Fig. 11
(5) 半跏坐。右手は胸の前に置き，金剛杵を握る。左手は腰のあたりに金剛鈴を保つ。渦巻型の髪型。冠飾。垂髪。瓔珞，臂釧，腕釧，聖紐，ドーティを身に付ける。台座左右に象。中央に人物像。

33 (1) Vajrasattva
(2) Nālandā; Nālandā Mus.
(3) Black stone, *ca.* 11c (Saraswati)
(4) Saraswati 1977: Pl. 168
(5) 半跏坐。右手は胸の前に置き，直立した金剛杵を載せる。左手は腰のあたりに金剛鈴を保つ。三山形式の宝冠。円形の大きな耳飾り，瓔珞，臂釧，腕釧，聖紐，ドーティを身に付ける。Vajrapāṇi (Saraswati)

34 (1) Vajrasattva
(2) Sukhabāpur; National Mus., Dacca
(3) Black stone, 4"×3"
(4) Bhattasali 1929: Pl. III(a) (b)
(5) 半跏坐。右手は胸の前に置き，直立した金剛杵を載せる。左手は腰のあたりに金剛鈴を保つ。垂髪。円形の大きな耳飾り，瓔珞，臂釧，腕釧，聖紐，ドーティを身に付ける。台座左右に獅子の浮彫。光背背面に銘文。

35 (1) Vajrasattva
(2) 出土地不明; 個人蔵(？)
(3) Brass, 11.5cm ht., 12c (Schroeder)
(4) Schroeder 1981: Pl. 72E
(5) 結跏趺坐。右手は胸の前に置き，直立した金剛杵を載せる。左手は腰のあたりに金剛鈴を保つ。円形の大きな耳飾り，瓔珞，臂釧，腕釧，聖紐，ドーティを身に付ける。

36 (1) Vajrasattva
(2) Gaya Dt.?, Bihar; 個人蔵
(3) Black stone
(4) 頼富 1990: 図107; 頼富・下泉 1994: 274
(5) 半跏坐。右手は胸の前に置き，直立した金剛杵を載せる。左手は腰のあたりに金剛鈴を保つ。渦巻型の髪型。三山形式の宝冠。垂髪。円形の大きな耳飾り，瓔珞，臂釧，腕釧，聖紐，ドーティを身に付ける。光背左右にグリフォンの浮彫。光背上部左右と台座左右に合計四尊の供養菩薩。頭光の周囲に銘文。

37 (1) Vajrasattva
(2) Nālandā; Nālandā Mus.
(3) Black stone, *ca.* 10c (Saraswati)
(4) 76YM 小110-20; Saraswati 1977: Pl. 161
(5) 半跏坐。右手は胸の前に置き，直立した金剛杵を載せる。左手は腰のあたりに金剛鈴を保つ。渦巻型の髪型。三山形式の宝冠。垂髪。耳飾り，瓔珞，臂釧，腕釧，聖紐，ドーティを身に付ける。光背上下左右に合計四尊の供養菩薩。五尊はそれぞれ火炎に囲まれた光背を持ち，作品全体にも同様の光背がある。

金剛薩埵（オリッサ）

38 (1) Vajrasattva
(2) Ratnagiri; 現地祠堂内
(3) Stone
(4) 佐和 1982: 挿図 2，図60; Mitra 1983: Pl. CCXL(A); 頼富 1990: 図 6
(5) 磨滅が著しく，特に左腕は残存部分が少ない。

39 (1) Vajrasattva
(2) Salempur, Orissa
(3) Stone, *ca.* 9c (Saraswati)
(4) Saraswati 1977: Pl. 158
(5) 結跏趺坐。右手は直立した金剛杵を胸の前で持つ。左手は腰のあたりで金剛鈴を持つ。渦巻型の髪型。冠飾，瓔珞，臂釧，腕釧。蓮台の向かって左寄りに帰依者の浮彫。台座最下段に銘文。宝珠型の頭光の浮彫。

40 (1) Vajrasattva
(2) Salempur, Orissa; Indian Mus., Calcutta
(3) Stone, *ca.* 9c (Saraswati)

(4) 76YM 大 66-9; 76YM 小 123-19; MY83 小 151-3; Sahu 1958: Fig. 46; Saraswati 1977: Pl. 160

(5) 結跏趺坐。右手は直立した金剛杵を胸の前で持つ。左手は腰のあたりで金剛鈴を持つ。円錐型の髪型。冠飾，瓔珞，聖紐，臂釧，腕釧，ドーティを身につける。光背上部左右に仏塔の浮彫。台座左右に帰依者の浮彫。

41 (1) Vajrasattva
(2) Ratnagiri, Reg. No. RTR-2, 21
(3) Stone, 16.5×16.5cm
(4) Mitra 1981: Pl. CLXXII(C)
(5) 坐像。腰から上のみ残存。右手は金剛杵を胸の前で握る。円錐型の髪型。冠飾，瓔珞，聖紐，臂釧，腕釧を身につける。光背上部左右に飛天の浮彫。

42 (1) Vajrasattva
(2) Ratnagiri, Reg. No. 1961/86
(3) Stone
(4) Mitra 1983: Pl. CCLXIX(C)
(5) 半跏坐。頭部欠損。右手は金剛杵を胸の前で握る。左手は腰のあたりで金剛鈴を持つ。

43 (1) Vajrasattva
(2) Ratnagiri
(3) Stone
(4) Mitra 1981: Pl. LXV(C)
(5) 半跏坐。右手は金剛杵を胸の前で握る。左手は腰のあたりで金剛鈴を持つ。奉献小塔の龕中の浮彫。

44 (1) Vajrasattva
(2) Ratnagiri
(3) Stone
(4) Mitra 1981: Pl. LXV(D)
(5) No. 43 に同じ。

45 (1) Vajrasattva
(2) Ratnagiri
(3) Stone
(4) Mitra 1981: Pl. LXVI(A)
(5) No. 43 に同じ。

46 (1) Vajrasattva
(2) Ratnagiri
(3) Stone
(4) Mitra 1981: Pl. LXVI(B)
(5) No. 43 に同じ。

47 (1) Vajrasattva
(2) Ratnagiri
(3) Stone
(4) Mitra 1981: Pl. LXVI(C)
(5) No. 43 に同じ。

48 (1) Vajrasattva
(2) Ratnagiri
(3) Stone
(4) Mitra 1981: Pl. LII(C); Bénisti 1981: Fig. 127
(5) No. 43 に同じ。

49 (1) Vajrasattva
(2) Ratnagiri, Reg. No. RTR-1, 589
(3) Stone, 18cm ht.
(4) Mitra 1981: Pl. XC(A)
(5) 結跏趺坐。右手は直立した金剛杵を胸の前で持つ。左手は腰のあたりで金剛鈴を持つ。円錐型の髪型。冠飾，瓔珞，聖紐。光背上部左右に蓮華。台座に供物の浮彫。奉献小塔の龕中の浮彫。

50 (1) Vajrasattva
(2) Achutrajpur; Orissa State Mus., Acc. No. 240
(3) Bronze, 32cm ht., 10c 以前(Mitra)
(4) Mitra 1978: Pl. 54
(5) 半跏坐。右手は金剛杵を胸の前で握る。左手は腰のあたりで金剛鈴を持つ。円錐型の髪型。冠飾，瓔珞，聖紐，臂釧，腕釧。

51 (1) Vajrasattva
(2) Achutrajpur; Orissa State Mus., Acc. No. 312
(3) Bronze, 8.3cm ht., 10c 以前(Mitra)
(4) Mitra 1978: Pl. 55
(5) 結跏趺坐。右手は直立した金剛杵を胸の前に保つ。左手は腰のあたりで金剛鈴を持つ。円錐型の髪型。冠飾，瓔珞，聖紐，臂釧，腕釧。

52 (1) Vajrasattva
(2) Achutrajpur; Orissa State Mus., Acc. No. 252
(3) Bronze, 15.5cm ht., 10c (Mitra)
(4) Mitra 1978: Pl. 56
(5) No. 51 に同じ。周囲に火炎と連珠を配した円形光背。台座左右に獅子。

53 (1) Vajrasattva
(2) Achutrajpur; Orissa State Mus., Acc. No. 247
(3) Bronze, 16.7cm ht., 11c 以前(Mitra)

(4) Mitra 1978: Pl. 57
(5) No. 43 に同じ。周囲に火炎と連珠を配した円形光背。

54 (1) Vajrasattva
(2) Achutrajpur; Orissa State Mus., Acc. No. 268
(3) Bronze, 22.5cm ht., 11c (Mitra)
(4) Mitra 1978: Pl. 58
(5) No. 50 に同じ。周囲に火炎と連珠を配した円形光背。

[引用文献]

石黒　淳　1985「金剛手の系譜」『密教美術大観　第3巻』朝日新聞社，pp. 181-191。

伊東照司　1981「エローラ石窟寺院の仏教図像」『仏教芸術』134: 84-119。

岩宮武二　1989『アジアの仏像（上）』集英社。

肥塚　隆　1985「大乗仏教の美術——大乗仏教美術の初期相」『講座大乗仏教10　大乗仏教とその周辺』春秋社，pp. 263-291。

佐久間留理子　1991，1992「パーラ朝における観自在菩薩の図像的特徴(1)(2)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』7: 109-148; 8: 95-110。

佐久間留理子・宮治昭　1993「パーラ朝における観自在菩薩の図像的特徴(3)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』9: 107-129。

佐和隆研編　1982『密教美術の原像』法蔵館。

堀内寛仁　1983『初会金剛頂経の研究（上）』高野山大学密教文化研究所。

宮治　昭　1981『インド美術史』吉川弘文館。

宮治　昭(代表)　1993『インドのパーラ朝美術の図像学的研究』（平成3・4年度科学研究費補助金研究成果報告書）。

宮治　昭　1995「インドの大日如来像の現存作例について」『密教図像』14: 1-30。

森　雅秀　1990「パーラ朝の守護尊・護法尊・財宝神の図像的特徴」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』6: 69-111。

森　雅秀　1996「パーラ朝の文殊の図像学的特徴」『高野山大学論叢』31: 55-98。

森　雅秀　1997「オリッサ州立博物館の密教美術」『高野山大学密教文化研究所紀要』10: 29-70。

森　喜子　1990-1992「パーラ朝の女尊の図像的特徴(1)〜(3)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』6: 113-155; 7: 155-192; 8: 69-114。

頼富本宏　1981「密教における部族(kula)の展開——とくに三部の形成について」『大乗仏教から密教へ』春秋社，pp. 415-429。

頼富本宏　1982「金剛薩埵図像覚え書き（上）」『密教図像』1: 30-45。

頼富本宏　1990『密教仏の研究』法蔵館。

頼富本宏　1991「中インド・シルプル遺跡の仏教美術」『仏教芸術』191: 40-57。

頼富本宏　1992a「東インド・オリッサ州所在ウダヤギリ遺跡の新発掘」『仏教万華——種智院大学学舎竣工記念論文集』（種智院大学学舎竣工記念論文集刊行会編）永田文昌堂，pp. 107-127。

頼富本宏　1992b「インド現存の金胎融合要素」『密教学研究』24: 11-30。

頼富本宏・下泉全暁　1994『密教仏像図典——インドと日本のほとけたち』人文書院。

Alam, A. K. M. Shamsul　1985 *Sculptural Art of Bangladesh: Pre-Muslim Period.* Dhaka: Department of Archaeology and Museums.

Bandyopadhyay, B.　1981 *Metal Sculptures of Eastern India.* Delhi.

Banerjee, R. 1994 *Ashtamahabodhisattva: The Eight Great Bodhisattvas in Art and Literature.* New Delhi : Abha Prakashan.

Banerji, Rakhal Das 1933 *Eastern Indian School of Mediaeval Sculpture.* Archaeological Survey of India, New Imperial Series, XLVII. Delhi : Manager of Publications.

Bénisti, M. 1981 *Contribution à l'étude du stūpa bouddhique indien: les stūpa mineurs de Bodh-Gayā de et de Ratnagiri.* Publication de l'École Français d'Extrême-Orient vol. 125. Paris : École Français d'Extrême-Orient.

Bhattasali, N. K. 1929 *Iconography of Buddhist and Brahmanical Sculptures in the Dacca Museum.* Dacca : Dacca Museum Committee.

Foucher, A. 1900-5 *Étude sur l'iconographie bouddhique de l'Inde, d'aprés des documents nouveaux.* 2 vols. Bibliothéque de l'ecole des hautes études : Sciences religiuses vol. 3, pts. I-II, Paris : Ernest leroux.

Huntington, S. L. 1984 *The "Pāla-Sena" Schools of Sculpture.* Studies in South Asian Culture vol. X. Leiden : E. J. Brill.

Huntington, S. L. & J. C. Huntington 1990 *Leaves from the Bodhi Tree: The Art of Pala India (8th-12th centuries) and Its International Legacy.* Seattle : The Dayton Art Institute.

Leoshko, J. 1995 Pilgrimage and the Evidence of Bodhgaya's Images. In K. R. van Kooij & H. van der Veere eds. *Function and Meaning in Buddhist Art: Proceedings of a Seminar Held at Leiden University 21-24 October 1991*, Groningen, Egvert Forsten, pp. 45-57.

Malandra, Geri Hockfield 1993 *Unfolding a Mandala: The Buddhist Cave Temples at Ellora.* Albany : State University of New York Press.

Mitra, D. 1978 *Bronzes from Achutrajpur, Orissa.* Delhi : Agam Kala Prakashan.

Mitra, D. 1981 *Ratnagiri(1958-61).* Vol. I. Memories of the Archaeological Survey of India, No. 80. New Delhi : Archaeological Survey of India.

Mitra, D. 1982 *Bronzes from Bangladesh.* Delhi : Agam Kala Prakashan Delhi Khandalavala.

Mitra, D. 1983 *Ratnagiri(1958-61).* Vol. II. Memories of the Archaeological Survey of India, No. 80. New Delhi : Archaeological Survey of India.

Pal, P. 1974 *The Arts of Nepal.* Part 1(Sculpture). Leiden : E. J. Brill.

Raven, E. M. & K. R. van Kooij 1992 Pāla-Sena Stone Sculptures from the National Museum of Ethnology, Leiden. In *Indian Art and Archaeology*, Leiden : E. J. Brill, pp. 94-128.

Ray, N. R., K. Khandalavala & S. Gorakshkar 1986 *Eastern Indian Bronzes.* New Delhi : Lalit Kalā Academy.

Sahu, N. K. 1958 *Buddhism in Orissa.* Cuttak : Utkal University.

Saraswati, S. K. 1977 *Tantrayāna Art: An Album.* Calcutta : Asiatic Society.

Schroeder, U. v. 1981 *Indo-Tibetan Bronzes.* Hong Kong : Visual Dharma Publications.

[付記]

本稿は名古屋大学教授宮治昭氏を中心としたパーラ朝の仏教美術に関する研究会の研究成果の一部である。本稿執筆にあたり，宮治先生からは貴重な図版資料を多数貸与いただいた。記して謝意を表します。掲載した図版はすべて筆者自身の撮影によるものであるが，写真撮影にあたり，Indian Museum(Calcutta), Nalanda Museum, Patna Museum, Orissa State Museum, Sarnath Museum,

National Museum(New Delhi) および Archaeological Survey of India の各機関のご協力を賜った。さらに，オリッサ州における現地調査ではウトカル大学教授 S. Sarangi 博士，プーナ大学助手 Y. Kar 博士，ビハール州ではパトナ博物館学芸員 O. P. Panday 博士のご助力を得た。ご協力いただいた方々に対し感謝申し上げます。なお，本稿は平成 9 年度文部省科学研究費補助金による基盤研究(C)(2)「オリッサ州カタック地区の密教図像の研究」（課題番号08610026）による研究成果の一部でもある。

口絵３　金剛手坐像　ウダヤギリ僧院跡

口絵４　金剛薩埵坐像　大英博物館